

註

まえがき

〔註1〕ただし、唯物論の枠内で、死後生存も含めた超常現象を説明しようとする試みも、それに意味があるかどうかを別にすれば、全く存在しないわけではない。たとえば、ニューカッスル大学の生物学者であり量子力学者でもあるガーハード・ワッサーマン (Wasserman, 1993) は、現実にそうした試みを行なっている。

〔註2〕ハーバード大学医学部麻酔研究所のヘンリー・K・ビーチャーは、既に七十年近くも前に、偽薬効果を検討する論文の中で、「モルヒネがもつとされている力はモルヒネが本来もっている効果と偽薬効果とが複合されたものなのであろう」(Beecher, 1955, p. 1606)と述べている。

第一章

〔註1〕福井大学教育学部の熊谷高幸によれば、自閉症児の中には、ある程度のカレンダー計算能力を示す子どもたちは稀どころか、かなりの比率で見られるようである(熊谷, 一九九一年, 九八ページ)。

〔註2〕このような神童たちが、具体的にどのような能力を発揮しているかについては、次の文献を参照されたい。イングリス, 一九九四年(二五九—一六〇、二七五ページ)。リムランド, 一九八〇年(二二—一五ページ)。トレッツファート, 一九九〇年。Baron-Cohen *et al.*, 1993; Brill, 1940; Cain, 1969; Hermelin *et al.*, 1983; Hermelin & O'Connor, 1990; Hermelin *et al.*, 1994; Hoffman, 1971; Hoffman *et al.*, 1979; Horwitz *et al.*, 1965; Laibow, 1990; Moriarty *et al.*, 1993; Nurcombe & Parker, 1964; O'Connor & Hermelin, 1992, 1994; Rubin & Monaghan, 1965; Smith & Tsimpli, 1995; Steel *et al.*, 1984; Treffert, 1988

【註3】 ロンドンのユニヴァーシティ・カレッジの言語学者、ニール・スミスらは、最近、十五—二十カ国語を読み書き話し翻訳できるイディオ・サヴァンの事例を詳細に報告している (Smith & Trippi, 1995)。【追記】その後、邦訳もされている。『ある言語天才の頭脳』(一九九九年、新曜社)

【註4】 ここでは簡単な記述に留めるが、この事例については、いずれ詳細に発表する予定である。【追記】それから既に二十五年もの年月が経過したわけであるが、事情があつてこの約束は果たせないまま終わってしまった。なお、この追記をすることになったのは、気づいてみれば、二〇一九年八月に四十二歳で亡くなったこの女性の四十三回目の誕生日であった。】

【註5】 少女の母親は、少女を知的障害児と見る一方で、根拠もなく、「この子は頭がいい」とも考えていた。このような矛盾が生ずる原因にも関係しているのかもしれないが、障害児の場合、子どもの症状の好転に対する母親の抵抗が一般に強く見られ、「本人が好転を始めたら、おかあさんのほうが治療に抵抗するようになって、心理療法を続けるのが難しくなります」という説明をあらかじめ繰り返ししておいても、いざ母親の希望するような変化が見え始めると、次の回には来院しなくなるという事例がこれまでもいくつか観察されている。たとえば、小学校高学年のある少女の事例では、言葉は発するものの誰に対してもコミュニケーションが成立しないという問題があつたため、母親がその改善を目的として娘の心理療法を希望して始めたにもかかわらず、数カ月後に、娘と私との間に初めてコミュニケーションが成立したのを隣に坐っている母親が見て驚いた次の回の直前に、電話で予約をキャンセルし、心理療法を中断させてしまったのである。

【註6】 この母親は、少女が人差し指を自分で曲げられるような形で右手の甲を握り、文字盤の文字を指させていたが、それでも少女の父親やボランティアの学生たちは、母親が文字を綴り出しているとして、しばらくは母親の主張を認めようとしなかった。

【註7】 母親によれば、その後、日本や合衆国の障害者施設で、それまでコミュニケーションが不能と考

えられていた子どもたちにこの方法を通じてコミュニケーションを試みたところ、ほとんどの場合、的確な返答をすることがわかったという。

〔註8〕この少女の場合、利き手は左手であることが後に判明している。

〔註9〕トレッフアートによれば、精神的発達障害で入院している患者では〇・〇五パーセントの比率でサヴァン症候群が見られるのに対して、自閉症では、その比率が九・八パーセントにもものぼるといふ（トレッフアート、一九九〇年、二二ページ）。また、ニューヨーク州ドップズ・フェリーの医師、ライマ・レイボウは、自閉症者のほとんどに神童的能力が見られると主張している（Talbot, 1990）。ただし、自閉症の出現頻度は、定義によっても異なるであろうが、人口一万人中四人程度にすぎないとされている（ハームリン他、一九七七年、六ページ）。【追記、その後、なぜか爆発的に増加し、最近では一パーセント前夜になったという報告もある（Fombonne, 2018; Mason & Kozlowski, 2011 参照）】

〔註10〕この点は、たとえば真性異言などの事例（ステイーヴンソン、一九九五年）を検討する際に大きな問題となる。生後に習ったはずのない外国語を話す能力が観察されているきわめて稀な事例では、その人物が本当にその外国語を練習した経験のないことが有力な根拠になるわけであるが、もしこれらの子どもたちのように、特に練習しているようには思われなくてもかかわらず、ふつうに言葉が話せる者がいるとすれば、真性異言の有力な裏づけとされているものが崩れてしまう可能性があり、その点の再考が必要となってくるからである。

〔註11〕カリフォルニア大学精神科のウィリアム・S・クローガーは、催眠療法中がんの退縮が起こった事例について述べている（Kroger, 1963, p. 247）。その事例が掲載されているのは、クローガーのその著書の第一版なのであるが、第二版（Kroger, 1977）からは、なぜかその記述が削除されている。

〔註12〕次章で紹介する私の心理療法では、その理論の核に、「内心」および「本心」という仮説的概念が設けられている。これによって、闕下自我という概念に内在する矛盾が解消される。

【註13】詳細については、ここでふれる余裕はないので、関心のある方はジャンらの著書（ジャン他、一九九一年）を参照されたい。

【註14】念写の研究者としては、他に、電気通信大学の佐々木茂美（佐々木他、一九七七年）、日本念写協会の宮内力（宮内他、一九七七年）、ヴァージニア大学のイアン・ステイヴァンソンおよびゲイザー・ブラッ ト（Geverson & Paul, 1969）らがいる。

【註15】その後、この著書は、一九九二年に福来出版から復刻・再刊されている。【追記、原著は、国立国会図書館のデジタル・アーカイブで電子版として公開されている。】

【註16】一九二〇年代にフランスで出版された催眠関係の著書（Baudouin, 1924, pp. 92-96）にもそうした事例が紹介されている。

【註17】一九九五年末か九六年初頭に、母斑の問題を扱ったステイヴァンソンの大著（二巻で、総計二千ページほど）が出版される予定になっている。【追記、一九九七年に出版された（Geverson, 1997a）。総計で二二六八ページになっている。同時に、一般向けの簡略版も出版され（Geverson, 1997b）、邦訳されている（『生まれ変わりの刻印』一九九八年、春秋社）。】

## 第2章

【註1】反応という概念は、わが国における分裂病家族研究の端緒（小坂、一九六〇年）を開き、その後、分裂病を対象とした独自の心理療法を開発した精神科医、小坂英世（小坂、一九七一年、七二年a、b、七三年a、七六年）に負うものであるが、私の概念は、反応を驚愕反応（小坂、一九七二年b、七八ページ）と考えた小坂の概念とは根本から異なってしまうている。その結果として、症状出現を機械論的に説明することが困難になるため、この点は、本書のテーマとも大きく関係しているのである。

【註2】本節では、この心理療法の要点だけを述べるほうが適切であるように思われるので、細かい説明

はなるべく註の中で行なうことにする。

〔註3〕後述するように、心身症を扱うようになってまもない頃は、基本的には従来の発想に近い心理療法に加えて、内観療法を必要に応じて併用していた(笠原、一九八〇年。笠原、日野、一九八七年a、b、笠原、長岡、日野、一九八七年a、b、c)。

〔註4〕幸福否定などと言うと、ごく一部の者にしか当てはまらないように感じられるかもしれないが、これまでのところでは、明確な例外には遭遇していない。心身症一般はもとより、神経症、精神分裂病、躁うつ病、アルコール依存症などの精神科系疾患にも、登校拒否、出社拒否、帰宅嫌悪、家庭内暴力などの行動異常にも当てはまるし、真の原因とどういふ関係があるかははっきりしないが、がんや腎疾患群や糖尿病をはじめとする各種慢性病の患者にも当てはまるようなのである。それどころか、広義の「心因性症状」をもっているという点で、多かれ少なかれ人類全体にすら当てはまるのではないかと推測している。【追記、その後、その推測は確信に変わり、現在に至っている。】

〔註5〕誤解されやすいので、ここで少々説明を加えておく。幸福の否定とは、本人にとつて大きな幸福を否定しやすいということであつて、ほとんどの者は、次善の幸福は否定せず、喜怒哀楽を比較的ふつうに示す。私の言う「幸福」とは、このように本人が意識で感ずる幸福感(たとえば、アーガイル、一九九四年)と同一のものではない。もちろん、ごく一部には、全ての幸福を否定するような者もいるが、その場合には、感情も全面的に否定されることが多く、自分を楽しませる程度の趣味をもつこともできないようである。

〔註6〕私の心理療法で用いられる「本心」や「素直な気持ち」という言葉は、通常用いられるものとは異なっている。実際には反応を通じて間接的にしか確認されないが、本心とは、本人のもつている素直な感情や能力が隠されている層という意味であつて、したがつて素直な気持ちとは、表面的な素直とは少々異なるものである。ついにながら、「内心」とは本心の否定にすぎず、独立して存在する

ものではない。本心で幸福を感じるからこそ内心がそれを否定し、その結果として心理的原因の症状が出現するのである。【追記、その後、両者の間には、いわば密かな連携のようなものが存在するらしいことが推定されている。】

〔註7〕当然のことながら、否定されるうれしきは個人によつて異なっている。全員が昇進や結婚や出産など、同じ出来事によるうれしさを否定するわけではないのである。ついながら、ここに掲げた出来事自体は、躁うつ病の状況論（飯田、一九八三年。Liberman *et al.*, 1984; Patrick *et al.*, 1978）でとりあげられることが多いし、一部は分裂病の生活臨床（江熊、一九七四年）や初期の小坂理論（小坂、一九七〇年）でも問題にされていたものである。もちろん、それは偶然ではない。それぞれが発症の原因に絡みやすい出来事だからである。

〔註8〕これは、意識側から見た表現であつて、すねている内心からすれば、うれしさを意識から隠蔽する目的でその記憶を隠していることになる。

〔註9〕フロイトの言う「抑圧」は、意識に置いておく和不快ないし苦痛な出来事を「無意識」に追いやるといふ意味で用いられるのに対して、私の言う「記憶の隠蔽」は、意識に置いておく和幸福感を感じてしまい、幸福を否定するうえでふつごうなので、不快な出来事に変形したうえで意識から消し去ってしまうという意味である。したがつて、その出来事が意識にのぼる際には、不快なものとして浮かび上がることが多いし、一部だけ記憶が残っている場合には、それは不快な部分に限定されている。たとえば、幼少期にせよ青少年期にせよ、家族で一緒に出かけた旅行については、「両親がけんかした」、「自分が迷子になつた」、「誰かが病氣になつた」などの（うれしさを否定するために誰かがけちをつけた）部分しか記憶に残らず、うれしかったはずの部分の部分が意識からほぼ完全に消えてしまう。つまり、フロイトの抑圧とは正反対の概念なのであるが、問題はそれには留まらない。その結果、人間観が根本的に異なつてくるからである。

ついでながら、隠蔽された記憶が意識に浮かび上がる時には、不快なものという形態をとりやすい。したがって、記憶の変形や作話がかなり混入し、自らが被害者として描かれることも多い。その記憶が意識の上に出るまでに起こる現象が見えたままにとらえられた時、解除反応などとして解釈されるものになるのである。解除反応については後述する。

〔註10〕 現行の心身症観を大きく誤まらせている理由のひとつは、精神分析の昔から指摘されてきた、「患者は原因を『抑圧』している」、すなわちその記憶を消しているという経験的事実を忘れ、治療者が患者の主張する『原因』をそのまま受け入れてしまっていることであろう。

〔註11〕 これまでの経験によれば、症状を引き起こすきっかけとなる出来事には、うれしさの否定の他に、自分から見て関係の薄い存在（たとえば、勤務先の同僚の会ったこともない母親や入院中に同室になった患者や、自分の飼っているペットなど）が死んだ時などに起こす悲しみの増幅（いわゆるペットロス症候群）と、『中級者クラス』（笠原、一九九三年b、六六三―六六五ページ）に關係するものがある。

〔註12〕 たとえば、「母親と電話している最中に下痢が始まりました」などのように、症状が出現した状況を記憶しており、それを自分から語る場合もないわけではないが、いずれにせよ稀である。

〔註13〕 記憶の隠蔽などと言うと、ふつうにはない稀な現象ではないかと考える者が多いであろう。たとえば、二、三日前に起こった出来事が、自分で撮影したその場面の写真を見てすら全く思い出せない事例もあるなどと聞けば、そのように考える者はさらに増えるかもしれない。しかしながら、私の経験では、記憶の隠蔽はごくふつうに起こる現象のようである。記憶が消えてしまっているため、本人にはわからないし、他者から詮索されることもほとんどない（そのようなことがあっても、「忘れてしまった」ですませることができ）ため、こうした現象が一般に知られていないだけなのであろう。

たとえば、子どもから頼まれて買物に行く場合には、それが何であつても忘れることはないのに対して、夫から頼まれたものについては、タバコなど決まったものであるにもかかわらず「絶対に」忘